

韓国現代政治史・社会史に関する口述記録

小針 進

(静岡県立大学)

はじめに

アーカイブズは、記録化されたものだけではなく、記録化されていない情報源をも記録として保存すべきであり、文書館等においてもオーラルヒストリーは基本の業務とみなされているという⁽¹⁾。韓国ではオーラルヒストリーを「口述史」と表現している。口述記録を残す試みが、個人ではなく官民の機関によってプロジェクトとして韓国で活発に行われるようになったのは、1990年代末からといってよい。

こうした動きは、民主化が進展する過程で、植民地時代や権威主義政権下で起った出来事に関する「真相究明」や「過去清算」を求める声が高まる潮流と時を同じくする。また、「個人史」という新語が登場した時代背景もあった。もっとも、諸機関で行われているプロジェクト相互間には連携性や役割分担をしている痕跡はみられない。盧武鉉政権下で国家報勲処が民間団体ともに「口述史研究所」を設立する計画だと、政府広報のホームページで伝えられたが、実現には至らなかった⁽²⁾。

本稿では、韓国現代政治史・社会史分野を中心とした口述記録の状況を、韓国に所在する文書館的な機能を持つ研究機関等（公的団体や大学）が主体となって実施したオーラルヒストリーの状況とその成果物を中心に、紹介することとしたい。ここでの内容は、関連文献（インターネット上を含む）によるほか、2008年6月までに各関係機関へ直接問い合わせた情報による。

本来ならば、記録史料を文書館等で公開する施設という意味でのアーカイブズ機能の紹介に限定すべきであるが⁽³⁾、こうした機能が構築された機関は韓国ではまだ多くない⁽⁴⁾。このため、その口述記録をとりまとめた当事者の資料集・報告書、

これを利用した当事者の論文なども、紹介するものとする。

1. 政府関係機関・公的団体等による口述記録

(1) 国史編纂委員会 <http://www.history.go.kr/>

この委員会は韓国史に関する資料を調査、研究、編纂する国家組織（1949年設立）で、2004年から口述史プロジェクトも始めた。多くの口述記録を蓄積済みである。

ホームページには、2004～2006年に整理した口述記録の目録が掲載されている。政治（18）、学術（2）、経済（2）、教育（1）、地域史（11）、女性（5）、在外同胞（20）、民衆史・技術史（3）、北韓史（2）、特殊分野（2）、個人口述生涯史（10）の11分野にテーマが分類されている（分野名は目録のまま。カッコ内はテーマ数）。具体的な口述記録の主なテーマ名は次の通りである。

【政治】「10.26と朴正熙政権」、「1994年北核危機」、「南北分断と韓国戦争期の政治活動と大邱刑務所の収監生活」、「李承晩体制と地方警察の活動」、「竹山 奉岩とHID（対北諜報機関）」、「解放後天道教の政治路線」、「上海仁成学校の経験」、「信川事件」、「1950-60年代原子力事業と科学技術政策」、「1970年代労使関係と労使政策」、「1980年前後経済安定化政策」、「朴正熙政権期文化財復元過程の推移と性格」、「セマウル運動の政策執行とセマウル指導者教育」、「解放以後ハンセン病政策と疾病経験」、「韓国軍および現代政治と白善燁」、「韓国戦争期米極東司令部駐韓連絡処の創設の活動内幕に対する生存者たちの口述調査」、「韓国戦争期韓国空軍の戦争遂行と戦後空軍の増強」、「学術】「国編60周年記念口述」、「解放以後大学

教育と社会科学の制度化」、【経済】「1950年代繊維工業の援助と工業化」、「解放後綿紡績工業の形成」、【教育】「日帝強占期中等教育以上経験者の教育経験と教育に対する認識」、【地域史】「1940-1960年代面長の口述を通してみた地方行政と地域政治勢力の動向——京畿道始興郡を中心に」、「地域民の生涯を通してみた解放と韓国戦争」、「生涯史を通してみた光州・全南の社会経済史」ほか8点、【女性】「5.18参与女性労働者生涯史」、「5.18を経験した女性たちの政治活動と人生の変化」、「家族計画政策の樹立と施行」、「口述を通してみた近現代女性生活史」、「宗婦の『婦徳』を通してみた儒教的女性の再照明」、【在外同胞】「米国内跆拳道組織の形成」、「沿海州高麗人の生活史と移民史」、「在米韓人口述生涯史」、「在日済州人（朝鮮人）社会に関する個人生涯史口述資料収集」ほか16点、【民衆史・技術史】「サンスエの口述を通してみた地域農楽形成史2005」、「同2006」、「忘れられた煮塩生産」、【北韓史】「北韓のキリスト教と思想史」、「解放後入北高麗人の役割」、【特殊分野】「郡山地域華僑の移住史」、「韓国華僑の民族アイデンティティ形成と同様」、【個人口述生涯史】「日帝末解放後商工人口述」、「2度徴兵されて3つの国の公務員だった煙草栽培技術者」、「日帝末期社会と少年飛行兵学校」、「韓国居住民主化運動関連宣教師」ほか6点

以上の76テーマの口述記録は、それぞれ複数の口述者によるものが多い。たとえば、「1994年北核危機」は盧在鳳、朴哲彦、韓完相など関係経験者ら7名が個別に口述している。延べ372人の口述者のうち、131人分の口述については、その主な内容、分量等をホームページで個々に把握できる。整理作業中のため、同委員会内の史料館での閲覧は整備されるまで原則不可だが、史料によっては担当研究室の判断で音声記録、テープを起こしたペーパーとも閲覧できるものがある（一部秘密部分あり）。

(2) 韓国学中央研究院（旧韓国精神文化研究院）
<http://www.aks.ac.kr/>

組織名が韓国精神文化研究院だった当時（2005年に名称変更）、ここでは近現代史資料チーム

（途中で韓民族文化研究所民族文化研究チームに移行）が作られ、中央日報統一文化研究所とも共同して、1997～99年に口述史プロジェクトが行われた。「20世紀の韓国人の生き生きとした体験を記録で残してまとめた韓国現代史を新しく発掘・復元する趣旨で、一般人自らの体験談を整理する事業」⁽⁶⁾と位置付けている。口述者は公募（自薦・他薦）となっているが、後に示すように口述者（45人）の多くは公人であり、必ずしも一般人ではない。「学問的価値が高く、優先的に学界が共有すべき」⁽⁷⁾として厳選した26人分の口述記録を、1999～2004年に6冊分に分けて刊行物として出版している。

口述者を、所収されている6冊の刊行物から発行順に示すと以下の通りである（〔 〕内はいずれも韓国精神文化研究院編）。なお、音声記録は公開されていない。

金綴洙（植民地時代の社会主義者）[韓国精神文化研究院編『遲雲・金綴洙』서울, 韓国精神文化研究院, 1999]

金ミンギョク（公職者）、黄ヨンジュ（知識人）、韓スンギョク（同）[以上、韓国精神文化研究院現代史研究所編『激動期知識人の 세 가지 삶의 모습』서울, 韓国精神文化研究院, 1999]

趙文紀（大韓愛国青年党結党者）、宋南憲（左右合作運動家）、金善（韓国独立党女性幹部）、白南権（統衛部人事局長）、朴璟遠（内務部長官）、崔夏鍾（非転向長期囚）、許英喆（同）、朴容九（芸術家）[以上、韓国精神文化研究院編『口述資料叢書①내가 겪은 해방과 분단』서울, 선인, 2001]

金正剛（左右両派で活動した運動家）、尹埴（国会議員）、李恒寧（文教部次官）、康誠元（KCIA研究室長）、辛永吉（経済企画院・財務部等に勤務）[以上、韓国精神文化研究院編『口述資料叢書②내가 겪은 민주화 독재』서울, 선인, 2001]

趙萬濟（三均主義の独立運動家）、金仁湜（親日派肅清特別委委員長）、元長吉（制憲国会議員）、申敬完（80年代に亡命した北党幹部）、金観洙（平壤出身の高校教諭）[以上、韓国精神文化研

究院編『口述資料叢書③내가 겪은 건국과 갈등』서울, 선인, 2004]

姜則模(米軍政庁官吏、以北五道民会長)、韓武協(陸軍本部防諜隊副部隊長)、方圓哲(滿州軍官学校卒、北で人民軍勤務後に南に亡命)、林芳鉉(国会議員、韓日議員連盟役員)[以上、韓国精神文化研究院編『口述資料叢書④내가 겪은 한국전쟁과 박정희 정부』서울, 선인, 2004]。

(3) 民主化運動記念事業会 <http://www.kdemocracy.or.kr/>

民主化運動の精神を国家的に継承・発展することを目的に2001年に発足したこの団体は、記念事業や遺蹟の管理のほか、史料を収集、整理、保存することも核になる事業である。その一環として、大韓民国樹立以降のあらゆる民主化運動(学生、労働、農民、女性、人権擁護、住民などの各運動)に関与した人々への口述史プロジェクトを実施している。2002～2005年の口述者は218名に及ぶ。

口述記録の目録は、2002～2004年の実施分(76テーマ、175名分)が『民主化運動関連人士口述史料目録集』(2006年)として、これに2005年実施分(13テーマ、43名分)をプラスしたものが『民主化運動関連人士口述史料目録集<増補版>』(2007年)として、それぞれ発行されている。これらの目録には口述者の氏名、口述記録の分量などが記載されている。原則的に口述記録の一般閲覧は不可だが(今後とも一般公開の予定なし)、用途によっては制限的に認められる場合がある。

(4) 国家報勲処 <http://www.mpva.go.kr/>

独立運動家など国家に貢献した者や退役軍人への礼遇に関する業務を行う官庁であるが、金貴玉によれば2001～2002年に同処は独立有功者20人に対するオーラルヒストリー・プロジェクトを実施したという⁽⁵⁾。この口述記録に関して、ホームページには記述がないものの、20人の記録が『独立有功者証言資料集Ⅰ』、『独立有功者証言資料集Ⅱ』として、2分冊で同処から2003年に発刊されている。

2. 大学等による口述記録

(1) ソウル大学校師範大学韓国教育史庫 <http://snuer.snu.ac.kr/history/O3.html>

この機関は、ソウル大学校師範大学教育研究所の付設機構として1993年に正式発足し、韓国の教育に関する記録集成と基礎研究を行っている。教育に関する資料集、研究叢書、研究論文集などを編集しているが、「韓国教育史庫資料叢書」の第6巻は、口述記録の『ソウル大学校師範大学50年:口述史資料集(1)』(ソウル大学校師範大学、1999年)である。教育関係者への口述史プロジェクトを地道に行っており、音声データによる口述記録を豊富に所有している。北朝鮮の教育への関心が強く、次のような音声データがある。趙明哲「金日成総合大学の教育」(1997年)、孫溪林「北韓教育の発展過程と最近改革動向」(1995年)、楊金成「北韓の科学技術教育:金策工業大学を中心に」(1994年)、牛林杰「北韓の教師教育:金亨稷師範大学を中心に」(1994年)。非転向長期囚金ソクヒョン(2000年9月に北へ送還。その後、2006年8月に病死)に対する口述記録の作成は、1994年から1998年にかけて行われ、その音声記録は72本の音声テープで保存されており、김석형口述, 이향규録取・整理『나는 조선노동당원이다』서울, 선인, 2001年として出版されている。

音声データをはじめとする口述記録は、ソウル大学校電子図書館のホームページ内にある韓国教育史庫電子図書館(<http://sdl.snu.ac.kr/Search.jsp?uid=114>)で検索が可能で、原則として外部の者もASFファイルなどを通じてネット上で閲覧できる。著作権が設定されている記録はネット上では不可だが、同大図書館へ直接来訪すれば閲覧可能である。

(2) 聖公会大学校社会文化研究院労働研究所 <http://www.laborhistory.or.kr/>

韓国学術振興財団(学振)の基礎学問育成事業の助成を受けて、この研究所では「韓国産業労働者の形成と生活世界に関する研究」を2002年から行ってきた。その主たるプロジェクトは1960

～70年代の労働者らに対するオーラルヒストリーである。当時の生きざまと歴史的事実を労働者の声から理解するため、当事者の高齢化が進むなかで早急に実施することになったとする。これらの口述記録をもとにして、3冊の報告書（いずれも李鍾九編、発行は서울, 한울）が、『1960-1970年代韓国の産業化와 労働者 정체성 (アイデンティティ)』(2004年)、『1960-70年代労働者の生活世界와 정체성 (アイデンティティ)』(2005年)、『1960-70年代労働者の階級文化와 정체성 (アイデンティティ)』(2006年)として刊行されている。口述記録原本の一般閲覧は、2010年を目途に検討中だという。

(3) 慶南大学校極東問題研究所 <http://ifes.kyungnam.ac.kr>

学振の基礎学問育成事業の助成を受けて、この研究所では「北韓の都市変化研究:清津、新義州、恵山を中心に」を2002～2005年に行った。北朝鮮の地方都市における党機関、企業所、工場の実態、日常生活の様子、中央からの統制などを究明する目的があるとする。このプロジェクトの主たる研究方法は、北朝鮮から逃れてきた人々に対する口述調査である。個人特定を避けるためもあってか、口述記録そのものは内部資料扱いで、一般閲覧は不可である。ただ、この口述記録をもとにして、3冊の報告書（いずれも崔完圭編、発行は서울, 한울）が、『北韓都市의 形成과 發展:清津、新義州、恵山』(2004年)、『北韓都市의 危機와 變化:1990年代清津、新義州、恵山』(2005年)、『北韓都市政治의 發展과 体制變化:2000年代清津、新義州、恵山』(2006年)として刊行されている。

(4) 淑明女子大学校アジア女性研究所 <http://asianfem.sookmyung.ac.kr/>

この研究所も、学振の基礎学問育成事業の助成を受けて、「韓国女性近現代史:政治・社会史、文化史、人物史」という研究を2002～2005年に行った。同研究の一環として、各分野で活躍した韓国女性に対する口述史プロジェクトを実施した。対象者は独立有功者、済州海女、姑と嫁、女教師、ファッションデザイナー、戦争未亡人、女性パル

チザン、米軍キャンプ女性、セマウル運動指導者、女性労働者、女医、女性軍人、民主化運動家の母、女性団体活動家などだ。これらの口述記録は、一般閲覧可能とはなっていないものの、その記録を基礎とした3冊の報告書（いずれも全京玉編、発行は서울, 淑明女子大学校出版部）が、『韓国女性人物史1:開化期～1945年』(2004年)、『韓国女性人物史2:1945～1980年』(2005年)、『韓国女性人物史3:1945年～現在』(2006年)として刊行されている。

(5) 20世紀民衆生活史研究団 <http://www.minjung20.org/main/>

この研究団は、嶺南大学校人文科学研究所、同大民族問題研究所、木浦大学校湖南学研究所、全北大学校全羅文化研究所、中央大学校人文科学研究所、韓国文化人類学会、歴史民俗学会、韓国芸術総合学校映像院などが、2002年にコンソーシアムを形成したものである。これも学振の基礎学問育成事業の助成によるものだ。この助成による基幹事業は庶民の生活史と関係する記録を韓国全土で収集、記録、整理であり、その記録は「デジタルアーカイブズ」になっている。http://www.minjung20.org/new_archives/ をクリックすれば、動画、音声、写真、電子文書などの記録（総計で7300余りのファイル）に、そのままアクセスし、ネット上で利用できる（著作権上の問題があるものを除く）。半数以上が口述記録（音声または動画）で、たとえば「映画館で看板書きをした話」、「1960～90年代の大邱線の鉄道と関連した記憶」、「1960～90年代に専売庁取締班と関連した記憶」、「日帝時代と解放後にかけての巡査生活」などといった数千のテーマが付いている。文化人類学者による聞き取りが多数と思われるが、ディシプリンを超えて有益な口述記録の蓄積といえる。

3. 口述記録を研究に活用する意味は何か

御厨貴はオーラルヒストリーを「公人の、専門家による、万人のための口述記録」と定義付けている⁽⁸⁾。韓国におけるオーラルヒストリーは、公人以外を対象にした者を含めて、口述史＝オー

ラルヒストリーと言い、しかも公人に劣らず非公人の口述記録も多い。民主化運動家、労働者、北朝鮮脱出者といった非公人の証言は過小評価できない。韓国現代史においては、意図的に記録（証拠）を残さなかった、あるいは言論統制で報道されなかった重要事項の存在も考えられ、公人・非公人を問わず、回顧による口述記録は意味があるう。

もっとも、文書に比べると、口述には不正確さ、主観、意図的な強調などがありえる。批判的な検討は必要であろう。御厨貴は岸信介のオーラルヒストリーでの文書資料と食い違いを例に、「岸の人間としてのひとつの側面を捉えることができたという点」で効用があるとしている⁽⁹⁾。また、口述記録は「(内容が) いつの話か」だけでなく、「(質問に対して) いつの発言か」が重要である。「いつの話か」だけの既存の文書史料では解明できない点が、補完的に口述記録からは読めるかもしれない。口述記録からは新事実が多く浮き彫りにならなくても、研究者の心象形成に役立つことは間違いない。

韓国人の日本や日本人についての話し言葉と書き言葉、私的言語と公的言語との間にズレがある点を、鄭大均はたびたび指摘する⁽¹⁰⁾。筆者が目を通した口述記録には、聞き手が韓国人であっても、「話し言葉」の日本・日本人像には寛大なエピソードが少なくない。たとえば、前述の旧韓国精神文化研究院による口述記録には、「いまの若い世代は日帝時代をまったくわかっていないんですね」と前置きし、「解放直後の人々は、日帝統治に対してはかなり好感を持っていましたよ。なぜならば秩序があったわけです。それに配給体制が正確だった。官吏たちの腐敗がなかった」といった発言がある⁽¹¹⁾。「書き言葉」には現れにくい言説であり、記録になることが前提であっても、口述が私的言語と公的言語の間のような曖昧さを持つから、こうした語りが出るのであろう。日韓関係史の研究に限定しても、口述記録の活用は有益な点があるといってよい。

- (1) 青山英幸「現代記録の保存体制構築を目指して」安藤正人・青山英幸編『記録史料の管理と文書館』（北海道大学図書刊行会、1996年）508-510頁。
- (2) 「訪れるサービス、発掘する報勲」（2005年6月4日）
(http://www.korea.kr/newsWeb/appmanager/portal/news2?_nfpb=true&portlet_categorynews2_2_actionOVERRIDE=%2F_pages%2Fbrief%2FcategoryNews2%2Fview&_windowLabel=portlet_categorynews2_2&portlet_categorynews2_2newsDataId=75084831&portlet_categorynews2_2category_id=p_mini_news&portlet_categorynews2_2currPage=&_pageLabel=policyinfo_page_03)（「大韓民国政策ポータル」ホームページ）。なお、これとは別に民間の研究者らによって、「韓国口述史研究所」（所長：尹沢林・木浦大教授）がソウル市内のビルの一室に2008年1月に設立された（『朝鮮日報』2008年2月5日付）。
- (3) アーカイブズには記録史料そのもの、保存する機関、公開する施設という3つの意味に整理されるという。丑本幸男「アーカイブズの科学とは」国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学・上』（柏書房、2003年）1-2頁、中島康比古「オーラル・ヒストリー・アーカイブ」御厨貴編『オーラル・ヒストリー入門』（岩波書店、2007年）101-102頁。
- (4) 韓国でのオーラルヒストリーをめぐる状況や課題については、金貴玉「韓国口述史研究의 現況 争点과 課題」（『社会와 歴史』第71号、2006）、尹沢林・咸翰姫『새로운 歴史을 쓰기 위한 口述史研究方法論』（서울, 아르케, 2006）に詳しい。なお、金貴玉は自身も戦争と南北分断に関する口述記録のプロジェクトを最もアクティブに行っている社会学者（漢城大教授）である。本稿執筆にあたって、金貴玉の論考から基本情報を多く参考にした。
- (5) 金貴玉、前掲、p.336。
- (6) 鄭容都「個人史에 반영된 『解放과 分断』」韓国精神文化研究院編『口述資料叢書①내가 겪은 解放과 分断』서울, 선인, 2001, p.9。
- (7) 張乙炳「刊行辞」『口述資料叢書④내가 겪은 韓国戦争과 朴正熙政府』서울, 선인, 2004, p.5。
- (8) 御厨貴『オーラル・ヒストリー』（中公新書、2002年）5頁。
- (9) 同上、66-68頁。
- (10) 鄭大均『日本（イルボン）のイメージ』（中公新書、1998年）を参照。
- (11) 정창현, 김지형「金正剛」韓国精神文化研究院編『口述資料叢書②내가 겪은 民主와 独裁』서울, 선인, 2001, pp.132-133。